

宮田幸一先生のご退職に際して

蝶名林 亮

宮田幸一先生がこの春で創価大学文学部をご退職になる。先生のお人柄を描きつつ、学問的なご業績を述べ、感謝の意を表するのがこの種の文章の目的であるが、私は先生の同僚であるというよりも生徒であった期間の方が長いので、一学生から見ると宮田先生がどのような方であったのか、僭越ながら、そして無礼を承知で、ここに記してみたい。宮田先生の学問的な業績については、本紀要に収録されている略歴・業績抄一覽や、先生ご自身のホームページを参照して頂きたい。

私にとって宮田先生は哲学という営みに初めて接する機会を与えてくださった先生の一人である。大学に入るまで私はそれほど意識的に哲学という学問に興味を抱くことはなかった。そんな私にとって、創価大学での学部時代に接した宮田先生の哲学の授業は、形容が難しい面白さとミステリアスな雰囲気満ちたもの

だった。

私が初めて受講した宮田先生の授業は「哲学概論」であった。デカルト、バークリー、カントなどの歴史上の哲学者たちが外在世界に関する知識についてのどのように考えていたのか、基本的には常に笑顔で、そして、わかりやすいたとえ話や絵を用いて説明してくださる、そんな授業だった。そのわかりやすい話の中には当時流行っていた映像ゲームの話などもちりばめられており、何とも言えない親しみやすさと不可思議さが共存している授業であった。ただ、話が面白いだけではなく、使用されていた教科書への批判も時折挟まれることがあり、大学での学問は単に教科書に書いてあることを学ぶことではなく、そこに書かれていることを批判的に検討することでもあることを、授業実践の中で示してくださっていた。

宮田先生の授業のもう一つの特徴は、ご自身の研究成果を授業内で反映されるという点であった。アメリカでの在外研究から戻られた際は、近年の認知科学と心の哲学の関係についてのどのような研究が行われているのか、授業の中で語っておられた憶えがある。このようなお話を聞いていたこともあったせいか、私自身、哲学という学問は他の学問領域と密接に関係しながら営まれるものであるという印象を当時から強く持っていた。まだ大庭健の『善と悪』なども出ていなかった当時、（現在ではもはや倫理学におけるメインストリームであるわけだが）メタ倫理学における研究成果を活用して先生の主要な研究対象である牧口常三郎の思想の分析を行うという刺激的なアプローチも授業内で示してくださった。私自身は一応メタ倫理学を勉強して研究者人生をはじめたのだが、そもそも「メタ倫理学」という言葉をはじめて聞いたのは宮田先生の授業に

おいてであった。

先生は常に笑顔で授業をされていたが、われわれ学生の多くはその笑みが「単に性格がよい人のニコニコ顔」とは受け取っていなかった（宮田先生の性格が悪いという意味ではなく）。ではどのような笑顔として受け取っていたかと言うと、言葉にするのは難しいが、単純なものではないことだけは感じていた。ある授業の教科書として使用されていた先生のご著書である『牧口常三郎はカントを超えたか』のあとがきには、早くに亡くされた奥様のことが書かれてある。奥様を亡くされた後、先生はご息女を男手一つで育ててこられたことになる。同僚の他の先生が授業内で、「宮田先生は娘さんの世話もあるのでなるべく授業は午前中に入れて午後はご自宅で食事の準備等をされているそうだ」という趣旨のことを話されていることもあった。ご家族を早くに亡くされ、娘さんを一人で育てつつ、われわれの前で、ゲームの話も交えつつ、そして鋭い洞察も挟まれながら、哲学の講義をされる先生……。われわれ学生はこのような背景を当然知りながら、先生の授業を受けていた。言葉にすることが難しいが、このような先生のお姿から、われわれ学生は哲学の知識だけではない、一種の「生き方」のようなものも感じ取り、学んでいたように思う。

先日、文学部の哲学・歴史学メジャーの教員の集まりがあり、その席で宮田先生にこれまでどのような考えで創価大学での授業に取り組んでこられたか、少しお話を伺うことがあった。そこで先生は、「哲学の授業は生徒たちに自分で考えさせるための刺激を与える場所にしようと思って取り組んできた」という趣旨のことをお話くださった。このようなカント的な教育方針を宮田先生から伺ったことは感慨深いものがあった。

先生のご研究の重要な部分を占めるのは、創価学会に関する思想的検討である。このような研究課題は、創価学会と何かしらの関係を持つ者が多い創価大学の学生に、時に自らの信仰観にも関わる問いを投げかける。先生ご自身が発表されたご論考の中で述べておられるが、創価学会に関する少し立ち入った分析・考察を授業の中でお話された時は学生からブーイングにも似た反応もあったという。ただ、先生のお心にあつたものは、ある主義・主張を押し付けるということではなく、あくまで、自分で自らが依って立つ思想の基盤について思いを致して欲しい、というお考えであつたのではなからうか。

思えば私自身もそのような先生のお考えに刺激を受けて、哲学の研究を志した一人である。哲学の研究者である以上、当然、自らの主義・主張は持つ。ただ、大学の教壇に立つ者として重要なことは、自らの考えも提示しつつ、その考えにどのような反論が可能なのか、学問を志す同志としての学生と共に真剣に議論を重ねることであろう。私のような駆け出しはそのような見識も技術もまだ持ち合わせていないが、学恩に報ずるためにも、宮田先生が創価大学の哲学研究・哲学教育の歴史の中で残して下さった伝統は守らねばならないと強く感じている。

――長年に渡る創価大学での哲学研究・哲学教育へのご貢献に、敬意と感謝の念を抱きつつ。